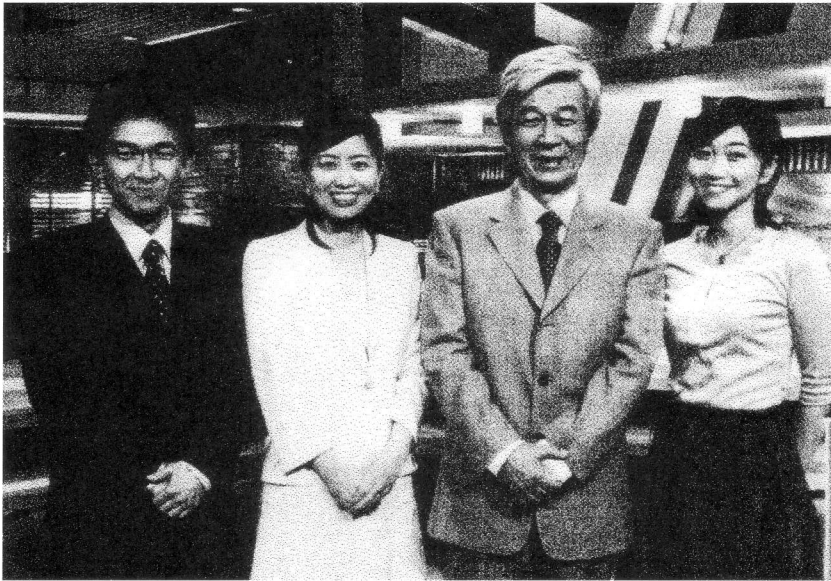


『筑紫哲也NEWS23』の 現在形の記憶

金平 茂紀 (TBS)



みんな語り
語りう民放史

題字 中川 順

民間放送の歴史を残す手作りの作業の一環として『筑紫哲也NEWS23』のことを書いて欲しいという依頼が僕の所にやって来た。僕は今、アメリカのニューヨークに住んでいるので、手元には資料など何もない。何よりも、去年11月に筑紫さんが亡くなって、その追悼文を結構な数、書いた後は、実際のところ何だか気が抜けたような気持ちに陥っていた。失ったものはあまりにも大きかったのだ。だが、テレビニュースの現場で30数年、仕事をしてきた自身の立場から、このことだけは伝え残しておかなければ、と思う事柄がいくつもあるので、この機会に略述しておきたいと思う。

キャスター・ニュースの先駆者
報道のTBS

日本のテレビニュースの歴史を語る上でいくつかのエポックメイキングな出来事がある。

たとえば1962年10月1日、日本のテレビニュースに一時代を画したJNN系列のキャスター・ニュース『ニュースコープ』のスタート。次に『ニュースセンター9』の磯村尚徳氏にみられたキャスター像の個性化、および「語りかけ」のスタイルの導入、久米宏をメイン・キャスターに据えて夜10時の時間帯に大型報道番組を開拓した『ニュース・ステーション』の創始などがそれらのことごらの一部である。

昨年11月、筑紫哲也さんが亡くなりました。朝日新聞ワシントン特派員、『朝日ジャーナル』編集長を経て、TBSの『筑紫哲也NEWS23』が18年余。静かな語り口でも舌鋒は鋭く幅広い人脈で文化を語り、最後まで現場にこだわった傑出したジャーナリストの、日本記者クラブ受賞半年後の死でした。

今回の『みんな語りう民放史』は『NEWS23』デスクなど、筑紫さんと交わりが深かったTBSアメリカ総局長金平茂紀さんの、筑紫哲也が、何を残し、何を継承すべきかです。

『筑紫哲也NEWS23』が始まったのは1989年の秋。この年は1月に昭和天皇が亡くなり、6月には天安門事件が起き、11月にはベルリンの壁が崩壊するという激動の年だった。

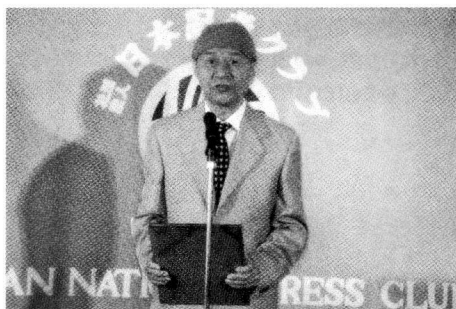
なぜ、TBSは夜11時台に大型のニュース番組を創設したのか、または、せざるを得なかったのか？ その作業に実際に関わった一人として言えるのは、前述の『ニュース・ステーション』効果が実は絶大だったのだ。

「報道のTBS」を長年にわたって自認してきたTBSはJNNにとつて、競合局(テレビ朝日)の夜の時間帯での大型ニュース報道番組の成功は、耐えがたい屈辱と映ったのだ。そこで、1987年秋に1時間のデイリーのニュース番組『プライムタイム』を立ち上げたのだった。

JNNの総力を結集するとの「上からの」号令のもとに『ニュース・ステーション』の真裏(午後10時)にぶつけられたこの番組は、しかし思わぬところで躓いてしまった。

その最も大きな要因のひとつが、実は筑紫哲也氏だったのであ

る。生前も筑紫さんは、さまざまな配慮からこのことを大っぴらには語っていない。



「望外の喜び」—日本記者クラブ賞

当初、メイン・キャスターに擬せられていた筑紫さんが勤務していた朝日新聞社との間で、この番組を引き受けるにあたって深刻な「軋轢」が生じたのである。当時、筑紫さんは無任所の編集委員の肩書でニューヨークに在住していた。やむなく、番組は筑紫さんのキャスター就任をあきらめ、TBSの朝のワイドショーを担当して人気を博していたNHK出身の森本毅郎氏をキャスターとしてスタートした。

しかし、この番組はさまざまな理由からわずか1年で打ち切られ、その後は社員の小川邦雄さんがキャスターをつとめる『ニュースデスク』が続いたが、この番組もわずか1年で幕を閉じることとなった。それほど『ニュース・ステーション』は強力で実力をつけていたのである。

編集長兼キャスター 『筑紫哲也NEWS23』の 新機軸

この間、古巣の朝日新聞社との「軋轢」を、細心の配慮で解きほぐしていった筑紫さんは、満を持した形で1989年秋の番組スタートを迎えることになる。

新機軸はいくつもあげられる。番組名に筑紫哲也という個人名を冠すること、キャスターは編集長も兼任すること、ニュース番組のテーマ曲をもつこと(最初のテーマ曲が井上陽水の『最後のニュース』である)、さらには、このことが大きな特徴だったのだが、二部構成になつていて(関西地方など一部は放映せず)、その第二部が「解放区」的な実験場になつていったことなどがあげられよう。

また、いくつかのシリーズ企画がストリートニュースと並列的に並び、「乱」「変」「論」「壊」「心」「幸福論」「このくにのゆくえ」「ニッポンが危ない」など、いわば筑紫編集長時代の『朝日ジャーナル』的な特集センスが際立った構成が、視聴者の共感を得ていった。

さらには街の声を拾いまくる『異論・反論・オブジェクション』や、ニュースの短い項目を独特の切り口でまとめあげる『ニュース・ラウンドアップ』などの新スタイルを確立していった。



「NEWS23」の打ちあわせ

名物コーナーとなる『多事争論』が始まったのは、番組開始から4年ほどが経過してからだったと記憶しているが、手元に資料がない

ので確かめようがない。

僕が編集長(職場での役職は『NEWS23』デスクと呼ばれていた)を務めたのは、1994年6月から2002年の2月までのおよそ8年間である。

歴代のデスクのなかで最も長い期間のお付き合いしてきたことになる。もっともその前のモスクワ特派員時代の4年間に、『NEWS23』とは深いつながりができてしまっていた。

前述した第二部のなかで『世紀末モスクワをゆく』という不定期の連続特集を企画制作させてもらい、きわめて長い時間のVTR作品を放送する機会を与えられたこ



モスクワ特派員時代の筆者(91.8.19)

とが大きかった。

これには、当時の第二部の岡田之夫編集長の尽力が大きかったのと、何よりも筑紫さん自身が面白がってくれて応援してくれた。

筑紫哲也とともに

人と番組が育っていった

僕自身が編集長を務めたからよくわかるのだが、『筑紫哲也NEWS23』は筑紫さんの編集方針やニュースセンスが番組内容やスタイルによく反映された番組だったと思う。筑紫さんは一見、我を張らないソフトなタイプにみえて実は、実に我を通すハードな芯を持っていた人だった。

デスクになると、通常は僕らは午前11時頃には出社して、それまでに新聞各紙に目を通し、11時30分の各社の昼ニュースをみて、NHKの全国ニュースが終わる頃に報道局の大部屋センターテーブルで招集される編集会議に出席する。その後、簡単なランチを済ませた後に、おもむろに筑紫さんに電話をかけるのが日課だった。前もって筑紫事務所にファックスで送ってある当日のニュースの項目表を材料にして協議し、今日の

トップはどれにしようか、あるいは、このニュースはもっと掘り下げが必要だとか、きょうの特集は何なのか、つまりその夜の番組内容全体を打ち合わせるのである。

その作業を積み重ねるうちに、自然とお互いの意思が通い合うようになる。あるいは違いを知る。そのような経験ができたことは、本当に恵まれていたと思う。通常、番組スタッフが出揃うのは、午後2時の番組の「0版会議」だった。

そこで、筑紫さんとの打ち合わせの結果をもとにさらにスタッフのあいだで協議を重ね、各自の仕事の分担を決める。考えてみれば、楽しいものづくりの場だった。本番が始まるまでのあいだ、各自、取材現場に散る、あるいは自分の企画のための調べものをする、あるいは、人と会ってくる等等など。何でもありだったのだから。

デスクという仕事はツライこともたくさんあったが、実にやりがいのある仕事だったと思う。特に『筑紫哲也NEWS23』のデスクを経験した人たちは皆そのことを知っているはずだ。辻村国弘さんは第二部で『世界遺産』シリーズの紹介をはじめたバイオニアで、

この『世界遺産』は後日、独立した番組として大きな成功をおさめることになった。

みんな『NEWS23』から出てきた財産だ。「タコ社長」と周囲から言われていた杉崎一雄さんは、仕事に没頭するあまり、デスクの当番日は埼玉県にある家に決して帰らなかった。TBSの同期生田中龍男や横田和人も、いい時期をともに過ごしてきた。



「地雷ZERO～21世紀最初の祈り～」

独自の切り口が生んだ
放送史に記録すべき一ページ

「クリントンと市民の対話

僕らの仲間内で「エッジの立つた」という言い方をしていた、独特の鋭角の切り口の特集群が『筑紫哲也NEWS23』の存在を際立たせていた。『家族の肖像』や柳

美里の『命』、終戦記念日特集、沖縄シリーズなど、今となつては稀有な実験的な特集群に出会えたこともこの番組の財産だったと思う。

さらには、この『NEWS23』の発展系として数々の特番がJNNの番組欄を飾った。これもひとえに毎日途切れることなく続いていたこの番組があったから成し遂げられたことである。

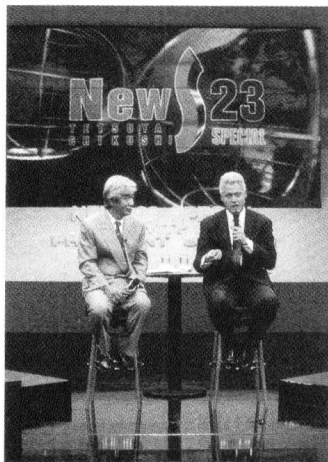
地雷ゼロキャンペーン『地雷ZERO』21世紀最初の祈り(2001年4月30日放送)、『筑紫哲也・立花隆21世紀プロジェクト』人の旅ヒトへの旅、『ヒロシマ』あの時原爆投下は止められた(2005年8月5日放送)、『東京大空襲』など。

さらには、各国の政治リーダーたちをスタジオに招いてのタウンホール・ミーティングが『NEWS23』の延長に展開された。

皮切りは、1998年11月に放送された『ニュース23スペシャル・クリントン大統領があなたと直接対話』だった。その後も、『朱鎔基首相があなたと直接対話』(2000年10月16日放送)と続き、韓国のノ・ムヒョン、イ・ミョンバク両大統領、アル・ゴア元副



筑紫哲也NEWS23スペシャル
クリントン大統領との対話



朱鎔基首相との対話

大統領、シウワルツェネガー・カリフォルニア州知事、小泉純一郎元首相、トニー・ブレア元首相と、いわば定番となつていった。

斬新な文化への視点を持つ

もう一点、付言しておけば、『筑紫哲也NEWS23』の文化事象に

対する扱い方の斬新さは、いくらか強調してもしすぎることはないだろう。大体がテレビという装置自体が文化を扱ってきたのである。そこから生み出される生産物(番組)は文化の一翼を担ってきた。お固いイメージの強い報道

道ニュース番組において、文化の置き場所をきちんと意識していた番組というのは、『筑紫哲也NEWS23』以前には存在しなかった。悔し紛れに言うのではないが、久米宏の『ニュース・ステーション』も文化を扱うセンスは『NEWS23』には大きく遅れをとっていた

と断じてよい。
とは言え、筑紫・久米の両キャスターが静かながらしのぎを削った『NEWS23』『ニュース・ステーション』時代は終わりを告げた。両キャスターともに、在任期間は18年半という長期に及んだのである。



筑紫哲也のDNAを
現在形で継承したい

さて、ここまで一氣にキーボードを叩いてきて、それでは『筑紫哲也NEWS23』に弱点、弱みがあったのかと問われれば、あまりにもたくさんあり過ぎて書ききれないほどのだ。それがテレビの報道ニュース番組のおかれてい

筑紫さんが亡くなり、これまでのような形で『NEWS23』が2009年3月末をもって終わりを告げることになり、日本のテレビニュース史に大きな地殻変動が起きようとしている。

新聞・通信社に伍して、ジャーナリズムの一角に確固たる位置を占めたいところだし、長年テレビニュースの仕事をしてきたのは、たくさんの先陣たちのたゆむことない努力の成果の継承があったからだ。

よくも『筑紫哲也NEWS23』はあれだけ長く生き延びてこれられたと思う。紙幅の許す限り、この番組が置かれていた環境の厳しさについて若干触れておくことが、テレビニュースの未来につながると思う。

これだけは確実なことだが、勤務するテレビ局の内外も決して『筑紫哲也NEWS23』を全面支持して支援してくれる人々ばかりではなかった。露骨に敵対の意思を示す人は表面的には少なくても、潜在的には「何だ、あの番組は、勝手なことばかりやっていて」というような、半分以上、嫉妬ややっかみに根ざした感情的な反発

を常にかけていた。

また、言葉の本質的な意味で言う、「反動」的な輩という人々は多かれ少なかれ組織内には存在するものである。それは政治家に対する取材者の立ち位置の取り方をみれば歴然としていたし、組織内で権力をどう行使するかという点でも、本来、水平的な取材者たちの職場において権威や権力をふりかざしたい人々が現れては去っていくのを、『NEWS23』という組織の内と外にしながら僕も見ざ



番組で多くの人が筑紫氏を語りました

るを得なかったことがあった。筑紫さんは、そのような動きと正面対決するようなナイーブな人では

なかった。おそらく朝日新聞時代のさまざまな経験が、そのような身構えを導いていたのだろう、と僕は想像するだけだ。

僕自身が番組に関わっていた際に経験したいくつもの「危機」を書き出したら、おそらく数冊の書物になってしまおうほどだと思う。これはホンネだ。

オウム事件の際の「TBSは死んだに等しい」発言の真意、阪神大震災取材現場での無力感とその後立ち直り、自社の「損失補てん事件」の際の報道姿勢、年金未納問題の際の責任の取り方、パトナーとしてともに出演していた数々の共演キャスターたちの交代とそれにともなう苦悩、みずからの後継キャスター選定をめぐるさまざまな逡巡と判断ミス、さらには、みずからの思わぬガン罹患と、そのことをどのようにニュースキャスターとして放送内で扱うかについての真摯な姿勢。あまりにも生々しいこれらのことがらをめぐる記憶。

僕が今の段階で記すことができるのは、大きな流れの中で、筑紫さんの意思は実に生臭かった、言い方を変えれば、人間として

苦悩しフェアであろうとしたということだ。そして、残念ながら、筑紫さんが亡くなり、今のテレビの世界の現実を見渡した時に、この一時代を画した報道番組の精神、言い換えれば『筑紫哲也NEWS23』のDNAを継承していく流れがまだ見えないことに義憤に似た感情を覚えるのだ。

「活字は記録、テレビは記憶」とよく氏は口にしていた。記憶は消えやすいものだからこそ、あの番組に関わった僕らは、その記憶に「現在形で」こたわるのだ。



筑紫さん ありがとうございます

資料提供

東京放送
日本記者クラブ